

第23回 福岡アジア美術館

アーティスト・イン・レジデンスの成果展 2024

周縁からはじまる

作家の言葉

わたしたちの暮らす長野県の安曇野には海の民の記憶を持つ安曇族が住んでおり、内陸にありながら巨大な舟を曳きまわし境内で男船と女船をぶつけ合うお船祭りが行われています。わたしたちは祖先の渡った海の道を辿るように、台湾、インドネシア、マレーシアの先住民調査を行いました。そしてその途上にある志賀島の志賀海神社に祀られる安曇族の祖である安曇磯良あずみのいそらのリサーチを本滞在で行いました。風浪宮の磯良塚、対馬の和多都美神社わだつみの磯良恵比須を訪れ、出会ったフナグロー舟。フナグロは船の競漕神事であり、海底に身を隠されていると言われる海神を招き入れる「神招き」の神事です。

学生時代にフェリーで釜山に行く船旅で見た島なみに、祖先の渡った海の道の記憶のような既視感があり、その時に訪れた対馬で出会った三柱鳥居に囲われた磯良恵比須の鱗状の石、磯良の名がずっと心に残っていました。貝殻を繋いで生まれる舟は、この鱗状の石のイメージと繋がります。磯良の諺おくりな えびすひこのみことは「戎比古命」と言い、諺とは、人が亡くなると守り神に変わるという考えから、その尊称としての贈り名を意味します。えびすは漁業神、漂着神、水の神であり、イルカやクジラの古語、勇魚いさなも、えびすと呼ばれます。鯨のような舟、それはインドネシアのジャカルタ国立博物館で見たパプアのアスマト族の英雄を意味する丸木舟の記憶とも繋がります。

志賀島を陸続きに砂洲で繋ぐ海の中道は古代には打昇うちあげの浜はまと呼ばれ、色鮮やかな赤い貝殻が打ち上がります。その貝だまりの貝殻を拾い集めて、膠で繋ぎ合わせることで貝殻の舟を作りました。そして志賀島に流れ着く海綿と出会いました。海綿は化粧や月経時に使用されていた女性と深く関わりのあるものです。潮の軌跡を辿るようにして拾い集めた海綿を膠と糸で繋ぎ合わせ、海の花束のような磯良の船を作りました。それは、わだつみの女船（海綿の舟）と男船（貝殻の舟）がフナグロして磯良を呼び出すような場です。

Artist Cafe Fukuokaのスタジオに隣接する大濠公園は、草香江と呼ばれた入り江でした。スタジオから宿へと帰る時に、大濠公園へと下り、開ける水辺の景色がとても心地よく、沢山の人が歩いたり走ったりしていて、草香江の入り江の地形の記憶を辿っているようでした。そして入り江を埋め立ててつくった舞鶴城の大濠（池）を貫くように三つの島が橋で繋がっています。この海であった場所に作られた島の道は、海の中道をなぞっているようでもあります。海の

中道と草香江の島の道を展示空間に重ねるように砂洲を築きました。この会場は旧舞鶴中学校の元給食室であり、舞鶴城には遣唐使船の使節団の迎賓館であった鴻臚館^{つくしのむろつみ}、筑紫館がありました。安曇氏は、内膳という宮内の食事を司っていました。リサーチの際に宗像大社の神宝館で見た沖ノ島の模型の巨石の上に組まれた石組。装飾古墳と舟形石棺の記憶。様々な記憶が重なり合い織り上げられてこの空間は生まれました。

『太平記』に、神功皇后に招かれた阿度部(安曇)磯良は、海底に住み、顔にアワビやカキがついていて醜いので、それを恥じて現れなかったが、舞を奏して誘い出すと、龍宮から借りた潮を操る霊力を持つ潮盈珠・潮乾珠を、皇后に献上したとあります。潮盈珠・潮乾珠を祀る和布刈神社の和布刈の神事では湯立神楽が舞われます。対馬の命婦の舞や高祖神社の夜神楽の磯羅の舞などの福岡県の芸能のリサーチを行い、そこで出会った山伏の影響で湯立を行う豊前神楽の国指定重要無形民俗文化財の大村神楽講と、長野県大町市で毎夏、主催している「信濃の国 原始感覚美術祭」より原始感覚一座を招き、貝殻を膠で繋ぎ合わせ、福岡県産のい草、筑後みどりを編んで作った磯良の面を纏い、即興の磯良の舞を最終日に行うことで海の民、安曇族の旅した船の記憶を呼び覚まします。

杉原信幸×中村綾花

1. 《海の中道の磯良》
貝殻、海綿、膠、粉茶、胡粉、綿糸、鯨の骨、い草、馬毛、砂、石、廃棄漁網、棚・インスタレーション
500cm × 1600cm × 243cm / 2024年
2. 《海綿の舟—湯蓋の森》
海綿、膠、粉茶、綿糸 / 243cm × 500cm × 74cm / 2024年
3. 《貝殻の舟—いさな》
貝殻、膠、粉茶、胡粉 / 55cm × 65cm × 360cm / 2024年
4. 《海の中道の磯良—磯良面(翁)》
鯨骨、貝殻、い草、馬毛 / 2024年
5. 《海の中道の磯良—磯良面(媼)》
貝殻、膠、粉茶、胡粉、馬毛、紐 / 40cm × 50cm × 8cm / 2024年